

東北学院大学 教養学部

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY Faculty of liberal arts



2011 年 3 月～2012 年 3 月 震災関連抜粋

■2011 年度 スクーリング情報（18）

2011/03/22 火 10:17 | 投稿者言語文化スタッフ

この度の震災に被災された皆さまには、心よりのお見舞いを申し上げます。

すでに東北学院大学ホームページでご案内いたしました通り、「第 2 回スクーリング」は中止となりました。

入学予定の皆さんは、それぞれに新たな困難を抱えていらっしゃるものと存じます。どうか日々を心強くお過ごし下さい。教員一同、再会の日を楽しみに待っています。

【 教養学部言語文化学科スクーリングスタッフ 】

言語文化学科

■人間科学科の卒業生のみなさんへ

2011/03/24 木 22:01 | 投稿者管理者

人間科学科長の水谷です。

今回の震災にあたり人間科学科のみなさんへの安否確認をしています。お一人の方とまだ連絡がとれていませんが、そのほかの 500 数名は全員無事であることがわかりました。ただし、被害にあわれた方がいらっしゃいます。まずは、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

ご卒業おめでとうございます。

本来であれば、今日、卒業式・祝賀会でみなさんとお会いするはずでした。みんなでお祝いをする事ができず残念です。私たちひとりひとりの生活が、地域が、日本が大変な時期に卒業、そして新たな出発となりました。

「新しい人生が、新しい世界が、自分たちから始まると思ひ込むところに青春時代の深い意味がある。」

河盛好蔵というフランス文学者の言葉です。まずは、「自分たちから始まる」と思ひ込み、そして次に「自分たちから始める」と思ひ込んで今後活動して下さい。それぞれの立場で活躍され、そしてそのことが新しい社会の創造につながることを期待しています。

私たち教員は、若い人たちの育成を通して社会に貢献できる、そして社会に誇れる人間科学科であり続けられるように頑張ります。みなさんも、今度は卒業生として人間科学科の発展のために力を貸してください。落ち着いたらどうぞ大学に遊びに、そして学びにきてください。

いつか再会できるのを楽しみにしております。

頑張れ！

水谷修

人間科学科

■平成23年度推薦入試、AO入試で合格された皆さんへ（人間科学）

2011/03/24 木 22:51 | 投稿者 管理者

課題レポートの再提出にかかわる「変更」のお知らせ

このたびの、文字どおり未曾有の大震災によって多くのかたが被災され、また東北の太平洋沿岸を中心とする多くの地域で甚大な被害に見舞われました。この書面をお送りした合格者の皆さんのなかにも、あるいは被害に遭われたかたがいらっしゃるかもしれません。被災された方々には心底よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興、復旧を願ってやみません。

「課題レポートの再提出」にかんしてのご連絡です。

すでに3月3日に皆さんにお送りした文書で、さきに提出していただいた課題レポートを教員の評価文にもとづいて書き直し、それを3月26日までに再提出してくださいとお願いしていましたが、このたびの災害で郵便にかぎらず多くの面で生活基盤が深刻な損傷を受け、それにとまって大きな混乱が生じ、それがなお続いています。こうした状況で、皆さんに期日までにレポートを再提出していただくことは難しいだろうと判断しました。すでに何件かそうしたご連絡やお問い合わせも受けています。

そこで、課題レポートは入学(式)後に提出していただくことに変更しました。

書き直した課題レポートを3月26日期限で郵送していただく必要はありません。もちろん、すでに郵送し終えた皆さんはそれで構いません。これから郵送しようと考えていた皆さんは、手もとに保管しておいてください。

すでに報道されているように、新学期の開始も5月にずれ込む見込みです。入学(式)の時期などについては東北学院大学のホームページでお知らせすることになると思います。皆さんが各自でそれぞれ以下の大学公式サイトにアクセスし、確認をしてください。

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>

お知らせは以上です。

災害後の生活上の大きな混乱はなお続いているようですが、体調の管理を万全にして入学までのこの時期を過ごしてください。人間科学科の教員一同、皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。

人間科学科

■今こそ君にボランティアを：地域構想学科学生諸君へ

2011/03/25 金 14:09 | 投稿者 地域構想学科スタッフ

地域構想学科長 宮城豊彦

私たちは今、とてつもない大災害に打ちひしがれています。東日本大震災の発災直後から大学当局・教養学部・学科の先生方の献身的な努力で、3月23日の夜、地域構想学科の学生諸君と教員・スタッフ全員の安否が確認されました。みんな無事です。まずはホッとしています。

学科長からの呼びかけが今日になってしまったのは、安否確認のためだけではありません。実は、私自身も

津波に遭遇し、携帯電話を水没させてしまい、更に自宅の電話もネットも使えず、皆さんとの連絡が出来ませんでした。沢山の方々との約束を無視した形になり、また心配をお掛けしてしまいました。まことに申し訳ありません。私は、地震後に多賀城で一夜を明かし、翌朝、無事帰宅しました。電気も水もガソリンも何も無い状態が続いていますが、私自身は元気で、被災の実態を調査しています。地域に密着した防災地図作りを実施してきた私達には、この災害を地域の人々がどのように甘受し、乗り越えるのかを見つめる必要があると思っています。わが町・七ヶ浜町で、災害の翌日から歩き回っています。

私たちは、M9.0 という世界最大クラスの地震と想定の数倍に達する津波に見舞われました。震災後 2 週間を経過した今も、避難所での生活を余儀なくされている方、家を無くした人々、関係者を失った方など、実に様々な苦難の渦中にあります。大学も、キャンパス、図書館、実習室、研究室などの被害が甚大で、機能は大きくマヒし、一朝一夕には修復出来そうにありません。大学の再開は、4 月末にずれ込むことが想定されています。

こうした災害の中、皆さんはどう過ごしていますか。地域構想学科を構成している諸君一人一人に、今こそ私は語りかけたいのです。

地域構想学科は、「地域で活躍したいという志」を持つ有意の若者を育成することを意図して設立されました。この志を今こそ、その立場・力量に応じて発揮していただきたいのです。この大震災と大津波では 2000 箇所もの避難所で、数十万の人々が困っています。今こそ、「私たちは自分に何か出来ることはないか」と自問して、決して無理をする必要はありませんし、危険を冒してはいけませんが、諸君一人一人が、いま出来ることを為すべく行動をしていただきたいのです。既に多くの学科の仲間が現場で自主的にボランティア活動を行っています。その中で、増子先生とそのゼミ生たちは仙台市の社会福祉プラザで、災害ボランティアセンター（災害 VC）に関わる仕事をしています。また大学もボランティアセンターを設立すべく動いています。

この呼びかけ文では、**特に増子先生が大学側のまとめ役となって関わっている災害ボランティアセンターでの活動への参加を呼びかけます。彼らは今、沢山の学生諸君の力を必要としています。**この活動によって学業上の現実的なメリットはありません。ですから、私の呼びかけには何の拘束力もありません。皆さんの善意に希望を託しているだけです。具体的には、以下の 3 つの項目に関わる諸君の力を求めています。もちろん、他の何か、他のどこかに関わってくれているのであれば、それで頑張っただけでも構いません。

1) 1. いそいで： 仙台福祉プラザ（青葉区五橋）で、**3 月 26 日(土)、27 日(日)**の両日、救援物資の仕分け作業。この作業に 30 人程度の参加が必要とされています。

2) 2. 泉区災害 VC 運営スタッフ。このセンターは泉区の社会福祉協議会によって運営されていますが、この運営に関わる方 20 人程度。

3) 3. 青葉区・太白区・若林区・宮城野区災害 VC での運営スタッフを各所で 20 名程度。

各項目の詳細・留意点は以下に示します。

・私たち**増子・宮城への連絡**は、「ボランティアをやりたいのだけど？」という「やりたいメール」ではなく、「私はこれこれのボランティアを、どこそこで始めています」という「**やってるよメール**」の報告をお願いします。今は、各自が必死で忙しく動いているのが実際です。

・参加は、一日だけでも構いません。もちろん長く参加してくれればそれだけ助かります。

・基本的には災害ボランティアセンターの運営参加ですが、ローテーションや、センターから避難所などへの派遣もあります。

・自分の行きやすいセンターで活躍していただければ結構です。

・各ボランティアセンターに**直接出向き、ボランティア受付用紙**で登録して下さい。登録は毎日することになります（もちろん 2 日目以降は簡略化されます）。

・軍手・帽子・マスク・飲み水・弁当・タオル・長靴を自分で持参してください。

・センターで登録を済ませ、災害ボランティアのシールをもらえれば、センターへの移動に関わる**交通手段（地下鉄や公共交通など）の利用は無料になることがあります。**

・活動時間は、午前 9 時～午後 3 時です。

・ボランティア活動にともなう怪我やトラブルには、当方がボランティア保険をかけています。

各区の災害ボランティア(VC)は、

・仙台福祉プラザ災害 VC :地下鉄南北線、五橋駅下車福祉プラザ方面出口、1F です。

・宮城野区災害 VC:宮城野区体育館 電話:022-231-1320 住所:宮城野区新田東 4 丁目 1-5(仙石線小鶴新田駅下車、北に歩いて 10 分程度、仙台市民球場の南隣です。)

・若林区災害 VC:市民センター 電話:022-282-0067 住所:若林区保春院前丁 3-4(若林区役所に隣接する文化センター別棟の北隣です。)

・太白区災害 VC:仙台市体育館 電話:022-244-1794 住所:太白区富沢 1 丁目 4-1(地下鉄南北線、富沢駅下車、入学式を行った体育館の第 2 運動場です)

・青葉区災害 VC :青葉体育館 電話:022-272-1574 住所:青葉区堤町 1 丁目 1-5(地下鉄南北線、北仙台駅下車、北東側の出口を出て、青葉区体育館西口階段上がって2F です)

・泉区災害 VC:泉総合運動場(地下鉄南北線、八乙女駅下車、泉中央駅との連絡バ スで到達できます)

教員:宮城豊彦 miyagi@izcc.tohoku-gakuin.ac.jp

増子 正 masuko@izcc.tohoku-gakuin.ac.jp

地域構想学科

■2011 年度 スクーリング情報 (19)

2011/03/31 木 14:54 | 投稿者言語文化スタッフ

3 月も末となりました。いよいよ明日からは卯月ですね。皆さん同様、泉キャンパスもまた日一日と新年度新学期への態勢を整えつつあります。

さて、第 2 回スクーリングは中止のやむなきに至りましたが、課題の提出までキャンセルとなったわけではありません。今一度、課題の内容を確認しておきましょう。

- (1). 推薦図書を読み、レポートを作成する。
- (2). 配布テキスト所掲の単語を暗記し、確認テストに臨む。

(1)については、入学後のオリエンテーション時に提出してもらいます。前回のレポートではケアレスミスが目についたので、丁寧な推敲を心掛けて下さい。なお、ノルマはレポート 2 本ですが、3 本(以上)を提出して下さい。それでも一向に構いません。どうか様々な学問分野に対する興味また好奇心を養っておいてほしいと思います。

(2)については、第 1 回スクーリングと同じスタイルでの「英語確認テスト」は行いません。ただし、入学後のオリエンテーション時に教養学部全体で「英語プレイスメントテスト(クラス分けテスト)」が実施されますので、やはり準備予習をするに如くはありません。配布 CD を流しつつ、テキストを何度も何度も復誦しておいて下さい。

それではまた。

言語文化学科 |

■塩釜地区のボランティア活動報告

2011/04/02 土 22:40 | 投稿者地域構想学科スタッフ

私たちは被災後、金菱先生と津波が襲来した地域に足を運んだ。そこでは、テレビだけでは伝わらない悲惨な光景を目の当たりにした。また避難所やボランティアセンターを回って、困っている方々が大勢いることを目の当たりにした。実際に自分の目でみたからこそ、できることがあれば力になりたいと思いボランティアに参加した。



塩釜地区のボランティア活動報告

活動拠点: 塩釜ボランティアセンター

活動内容: 津波で浸水した住宅の清掃(家具や濡れた畳の搬出、泥かき作業)

活動の流れ:

1. 9時50分に受付
2. ボランティアセンター側からの呼びかけで、住宅毎にチームを形成(男6人、女2人)
3. 塩釜ボランティアセンターのスタッフが運転するマイクロバスで移動
4. 清掃
5. 迎えは午後2時半
6. チームリーダーが報告
7. 次の仕事依頼で移動
8. ディサービスセンターの清掃(既に午前中から作業してる人もいて計30名ほど)
9. 16時に終了(明日に持ち越し)
10. センターに戻り解散

備品:

自前で用意したものは、汚れていい服装、マスク、長靴(ボランティアセンターでも借りられる)、昼食
ボランティアセンターで借りたものは、軍手、ゴム手袋、一輪車、デッキブラシ、スコップ、台車

私たちの同世代かそれ以下の若い人たちがたくさんボランティアに参加していた。一緒に活動したグループには、70歳すぎの男性も参加していた。地元の人ばかりでなく、東京から来た人や外国の方たちなどもそこにはいた。今日は、午前中おばあちゃんひとりで住んで居られる家に8人のボランティアで行ったが、これら膨大な搬出作業をおばあちゃんひとりだけではとても困難だと感じた。また、午後からの作業は、大人数にも関わらず津波の甚大な被害のため終わらなかった。1日の作業を通して、泥の匂いと重さ、水の量は想像を上回るもので、皆泥まみれの作業だった。

さらに、一軒に1日8人前後派遣されるということは、たくさんの人達がボランティアに参加していても、まだ

まだ道のりが険しいことが容易に想像された。作業をしていると近隣のお宅でも、手伝ってほしいと声がかかり、このことからもっともっとボランティアの必要性を感じざるをえなかった。

今回は他県からのボランティアの受け入れをしている場所だったけど、まだまだ他県からのボランティアの受け入れ体制が整っていない地域が多くあるということで、そのような地域はさらに大変であるはずである。これからボランティア活動が続けていき、南三陸町なども訪れたいと考えている。

作業が終わると、私たちが担当したおばあちゃんは、涙を流し何度もお礼をいった。それだけ困っていたことに驚いたし、私たちは今ある力を、大きなことや小さなことに関わらず人を助けるために使うべきだと身をもって体験した。

(地域構想学科3年生大内千春・長島華子)

地域構想学科

■ “ギャップ”を感じた震災

2011/04/19 火 00:23 | 投稿者地域構想学科スタッフ

4月14日、地域構想学科の4年生・大学院生の10名は宮城先生・植田先生・金菱先生と共に、東日本大震災による津波の被害を受けた宮城県気仙沼市の調査に足を運んだ。東北学院の同窓会気仙沼支部長の斎藤欣也さん、支部員の庄司幸男さんに案内していただき、被害の様子を確認することが出来た。斎藤さんは家と経営する商店を流され、庄治さんは体調を崩されているという事であったが、私達にとっても丁寧な案内してくれた。二人とも冗談を飛ばしている等、被災しているのにとても元気であったのが印象的だ。



新聞やテレビ等で、今回の被害を映像や写真で見て被害を理解しているはずなのだが、実際に見てみると、瓦礫の山、流されてしまい無くなってしまった桟橋、今にも倒壊しそうな家屋、津波の後の火災で面影も無く壊滅した街並みを見て言葉を無くしてしまった。また現地は燃えた薬品の臭いで満ちており、カモメの鳴き声だけが鳴り響く焼けた街並みで何処か落ち着かない恐怖のような感覚を覚えた。



市役所にも足を運んだのだが、安否確認の情報などで一杯になっており、瓦礫が片付かない市街と合わせて、私はまだ街全体の時が止まっている感覚を覚えた。春の陽気が漂い、桜ももうすぐ見ごろというはずなのに、人々の生活は3月11日以降動いていない。私の生活はライフラインも復旧し、日常生活が戻りつつあるのに、気仙沼は震災直後と何一つ変わっていないような景色・傷跡が色濃く残っているのだ。また気仙沼市内でも少しだけ高い位置にある為、津波が全く押し寄せなかった家屋、津波で流された瓦礫が溜まり、上手い具

合に被害を免れた家屋など、天国と地獄がはっきりしすぎているのだ。同じ被災地でも**被害状況がまるで違うという”ギャップ”を感じ得ずにはいられないのが今回の震災であると私は感じた。**



その後リアスアーク美術館の副館長である民俗学者の川島秀一先生のお話を伺う事が出来た。津波により今まで調査にあたった地域や携わった人達、貴重であった古文書・漁具などの民俗資料を失った事が何より辛いと語られ、地域構想の学生として辛さを痛感した。また川島先生自身も自宅を流され、お母さまが行方不明であるという被災者の立場でありながら、研究者としてこの被害を伝えるために今後一年間調査に当たり、復興史という報告書を作っていくという事であった。



今私達学生に何が出来るのだろうか。震災後ボランティア活動に積極的に参加している学生も多くいるだろう。街中で募金をした人や、救援物資を届けた人もいるだろう。私自身はまだボランティア活動も行えていないし、今すぐ参加出来るかはわからない。ただ出来る事というのは今だけでなく、むしろ今後より出て来るであろう。現段階では支援物資は食料品や衣服等の生活物資が優先して考えられてしまうが、学校等では図書館の本が無くなってしまい、本を寄贈してほしいとの声もある。仮設住宅にも入る事が出来、日常生活を取り戻しつつあるように見えても、心に大きな傷を抱えている人だって今後出てくるだろう。その人々の傷を少しでも理解しようとし、癒していくボランティアの形だってあるはずだ。仮に復興まで10年かかるとしたら、まだ1カ月ちょっとしか経っていない。これからよりボランティア・支援の動きが必要になってくるはずなのだ。私達東北学院大学の学生は被災地の学生として、この出来事を決して忘れる事や、風化させる事なく、自分達の今後と密接にかかわってくるものであると認識して生活していく必要があると強く感じた。

私があと一年となった学生生活で学生として貢献できる事が多くはないかもしれないが、今回の震災を社会的見解で震災を分析し、卒業研究として文章や写真で記録していきたいと思っている。その中で現地に入り、手伝える事があれば何でもしていきたいし、お世話になった地域に少しでも恩返しが出来ればと考えている。
(地域構想学科 4 年生金菱ゼミ 佐藤航太)

地域構想学科

大震災が起きた日、私は南三陸町の友達から連絡を受けました。「役場と消防署が流された。」……その言葉に軽く、「お互い頑張ろう!」と返してしまった私。状況がわからなかったことありますが、未だにこのことを後悔しています。



大震災後、私はキリスト教団が行う「支援物資の仕分けボランティア」に1週間ほど参加しました。そこで、言語文化学科の佐伯先生に偶然にもお会いしました。先生も私も、「何かしたい。」と思っていた、そんなつながりがありました。

その後、3月29日からほぼ1か月間、私は日本財団が多数の専門NPOとともに実施している「被災者をNPOとつないで、支える合同プロジェクト(つなプロ)」で、ボランティア活動をしました。この「特別な支援を必要とする被災者と、専門的なスキルを持ったNPOを結びつけるプロジェクト」で、私は宮城県内9市町の避難所(31か所)と被災地を訪問しました。

アセスメント班として活動した時には、避難所を訪問し、聞き取り(ニーズ)調査を行いました。避難所の様子は、人数や被災状況、管理者、運営の仕方によりまったく違いました。マッチング班として活動した時には、本部にとどまって、アセスメント班から届く情報をもとにニーズの洗いだし、そして実際に専門NPOとマッチングさせる仕事にかかわり、その大変さを知りました。

これまでの活動をふり返って、私は以下の5点が重要であると感じています。

- ①**避難所の管理者・運営体制のサポートとケア** 大震災による被害が予想以上に大きく、指定避難所でない施設も急きょ避難所となったために、運営がうまくいっていない現状がありました。被災者の方々だけでなく、避難所の管理者そして運営体制自体をサポート、ケアすることの重要性を肌で感じました。
- ②**継続的な支援を行う体制づくり** 大震災後、多くの方々が「支援物資を届けたい。」と思ったことでしょう。これからも、継続的な支援・サポートはますます必要で、被災者にとって長期的な生活の支えとなるはずです。
- ③**被災者自身の雇用確保(生活の安定の確立)** 被災者の雇用確保は、生活の支えに直結します。どんなに支援を受けたとしても、最後は自分で生活を成り立たせなければなりません。雇用の確保が迅速に行われることが望まれます。
- ④**細かいニーズ・不安の発見** 私が参加した「つなプロ」のように、細かいニーズ・不安を聞き取っていく活動は、これからも被災者の支援・サポートを行う上で欠かせません。恐ろしい・悲しい体験をされた被災者に対し、心を寄り添えられるように、地道に私たちが行っていける活動の一つだと思います。
- ⑤**被災地との関係づくり** 実際に被災地に入り、「きちんとお話を伺うこと」がどんなに難しい作業であるか、気づかされました。毎日バタバタと落ち着かない環境の中で、避難所の管理者そして被災者の方々には本当に

心優しく接していただき、ご理解・ご協力をいただきました。長期的に、しっかりと被災地とつながっていくことが今後私たちに求められています。



被災地では、どんなに精神的・肉体的に苦しく、厳しい環境の下でも、たしかにそこで懸命に生きている人たちがいることに改めて気づかされ、また同時に、支えたいと活動している人たちが数多くいることも知りました。

県内を回っていた私に「からだ大事にね。」だなんて心配してくれる被災者のおばあちゃん。そんな心温かい東北の人々に胸を打たれ、涙をこらえる日々でした。

今後も被災者の心に寄り添うことを忘れず、東北・宮城が前に進んでいく姿をみんなで支え、見守っていきたいと強く思っています。大震災後、私は何度、「私には何ができるんだろう？」と心に問いかけたことでしょうか。「宮城の学生として、地域構想学科の一員として、私に何ができるだろうか？」…… 私はこれからもずっと心に問い続けていきます。

仙台の学生よ、集い、ともに考えよう。遥かなる未来を信じて。

教養学部 地域構想学科 2年 木村彩香

地域構想学科

■ 避難所にお邪魔しました

2011/05/08 日 23:15 | 投稿者 言語文化スタッフ



5月1日、山崎冬太先生以下、教員3名と学生11名が石巻市の飯野川第一小学校にお邪魔しました。この体育館は雄勝地区に居住していた方々の避難所の一つとなっています。我々のミッションは、避難所の小中学生たちの遊び(遊ばれ?)相手を務めること。泥を暑い瓦礫を撤去したりという内容ではありませんが、これもまた立派なボランティア。学生諸君はかなり緊張気味で体育館の扉を叩いたわけですが、首尾は如何だったのでしょうか。

木村智美(教養学部言語文化学科4年):「私は今回小学生の女の子たちと鬼ごっこをしたり、裏山に行って遊んだりしました。少しでも子どもたちが笑って過ごせるように、微力ながらこれからもボランティアを継続していきたいと思います。」

佐藤菜美(教養学部言語文化学科4年):「飯野川の子供たちに会うのは2回目でしたが、初めて会った時よりも心なしか子どもたちも、また大人の方々もストレスが溜まっているようでした。避難所での集団生活で、疲れも蓄積していますし、人間関係のぶつかり合いもあることを聞いて、一日でも早く仮設住宅の建設が進むと

いいなと心の底から感じました。」

菅原彩(教養学部言語文化学科 2 年):「私は子供の遊び相手を務めました。子供たちは笑顔で垣間見せてくれ、楽しんでいるようでした。同時に、私もその笑顔にとっても元気づけられました。これからも積極的に活動していきたいです。」

須藤奈央(教養学部言語文化学科 2 年):「最初は子ども達と距離があったけれど、遊んでるうちに笑顔になってくれました。子ども達に経験した津波の話をされた時は、どんな言葉をかけるべきか迷ってしまいましたが、元気に遊んでくれて、私自身も良い時間を過ごせました。」

須藤麻衣(教養学部言語文化学科 2 年):「私は小学生と遊びました。最初は何をすれば良いのか戸惑いでしたが、遊んでいるうちに少しずつ仲良くなれました。津波の被害により子供達は避難所での生活を余儀なくされていましたが、明るい笑顔が見られて良かったです。」



佐藤拓(教養学部言語文化学科 4 年):「大災害にもめげず元気に過ごす子どもたちに逆に元気を分けてもらった気がします。小さな力かもしれませんが今後もサポートを継続し、少しでも被災地の役に立てるよう頑張っていきたいと思います。」

鈴木翼(教養学部言語文化学科 4 年):「飯野川でのボランティア当初は、子供たちとの接し方に迷いもありました。それでも一緒に野球をすることで、少しずつ子供たちと心を通い合わせることができました。これからも継続的に参加したいと思います。」

佐藤諒(経済学部経済学科 3 年):「小学校に向かう途中の被災地や避難所の状況は、テレビで観るものとは違い、言葉でもないほど悲惨でした。でも僕と一緒に遊んだ子供たちはそんなことを感じさせず、前向きに生きていると感じました。」

なお、同小で活動中の東北福祉大ボランティアグループの皆さん(『チームアスリート』)には、お世話になりました。ここに記して感謝の意を表したいと思います。彼らの存在と活躍を知り得たことも、今回の大きな収穫でした。

飯野川第一小学校へは、5 月 4 日にもお邪魔しています。この日はボランティアステーション長の佐々木俊三先生が加わり、南三陸町の方々が避難していらっしゃる登米公民館や津山若者総合体育館へも車を走らせました。両避難所へ文具類を届けること、これが我々のミッションでした。

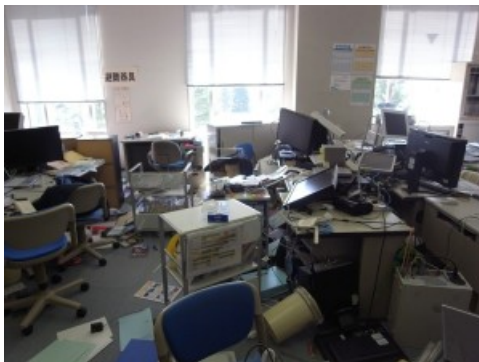
登米公民館にはご当地出身、この春に卒業したばかりの川村真衣さんがさまざまな手筈を整え、待ってていました。津山の体育館にも同行してくれた川村さんは、まさに八面六臂の大活躍。頼もしく逞しい卒業生をもつ我々の鼻は、否が応にも高くなったことでありました。



言語文化学科

■松研ブログ：「今週の松研」

2011/05/24 火 19:20 | 投稿者情報科学スタッフ



写真①

みなさんお久しぶりです。松澤研究室のブログこと「今週の松研」が1年と数カ月の時を経て再スタートすることになりました。3月11日東日本大震災は私たちにとって忘れられないとても大きな災害でした。多くの方がつらい思いをしたと思います。それから2カ月…。甚大な被害のあった東北学院大学泉キャンパスも少しずつ復旧されてきました。今日は、そんな学校の様子を少し紹介していきます。

震災当日私は、東北学院大学泉キャンパスの実験室で卒業論文のまとめをしていました。その時、印象に残っていることは、立っているのもやっとなほど揺れている中建物から出ると、キャンパス内のマンホールが飛び上がったことでした。自分の身の危険と、仲間や家族が無事であるかどうか心配事が頭をよぎりました。

そして数週間後…。

少しずつ食べ物も手に入るようになったころ、学校内部に特別入れてもらえる機会があり、震災後のキャンパスをゆっくり見ることができたのですが、キャンパス内の隆起と沈降がひどく足元をみながら歩かないといけないうほど、変わっていました。

写真①に載っている部屋は、日ごろから授業や実習室として利用でき、私たち学生がよくお世話になっている情報処理センターの事務室です。普段はきれいに整頓されている書類やパソコンが、あたり一面に散らかりとても震災前と同じ部屋だとは思えませんでした。

それからまた数週間後…。

工事が本格的に始まりました。いろいろなところにひびが入ったり、ガラスが割れたり、散らかったり、多くの被害があった泉キャンパスですが、5月9日から通常授業が始まり、あともう少しでもと通りの泉キャンパスに戻りそうです。

松澤研究室の実験室は昨年、4号館1階コンピュータ科学小実験室1・2・3の三つの教室に移動しました。1年前と変わらず、みなさんを歓迎します。松澤研究室に興味がある方、私の地震の時の話をもっと詳しく聞きたい方などいましたら、どうぞ遊びに来てください。

遅くなりましたが今回のブログ担当は博士課程前期1年櫻井です。1年と数カ月前、学部生の3年生としてこのブログを書いていた私も大学を卒業し、今では博士課程前期の学生となりました。また、みなさんに楽しんで読んでもらえるように頑張りますのでよろしくお願いします。

来週もお楽しみに。

(文: 松澤研究室 M1 櫻井)

情報科学科

■ 泉キャンパスボランティアステーション開設！

2011/06/07 火 19:23 | 投稿者 管理者



東北学院大学では地域の情報を集約・共有し、支援を必要としている人とボランティアをする人、県・市ボランティアセンター、全国大学をつなぐ支援の中継機関として、災害ボランティアステーションを開設しています。学生ボランティアが運営を支援しています。

<http://step-tg.jp/volunteer/>

これまで、土樋のステーションのみの活動でしたが、この度、泉キャンパスにもステーションを開設しました！

現在行っている業務は、学生・教職員のボランティア受付登録です。泉で登録することで、土樋で募集しているボランティア活動に参加することができます。

ちなみに写真の本棚には全国から、学内の教員や学生から届いた辞書や参考書が保管されています。被災地に届ける活動も予定されています。

受付対応時間：月～金曜日まで 10:30～16:00

場 所：泉キャンパス 3 号館 5 階 3501 室

教養学部

■ 子ども達からパワーをもらってきました（ボランティア）

2011/06/10 金 07:23 | 投稿者 地域構想学科スタッフ

震災ボランティアの一環として、私達は 6 月 2 日に多賀城市の学童保育「もみじ学級」へ行ってきました。学習支援すること、一緒に遊ぶことを通じて、震災した子ども達を含む放課後健全児童育成事業をお手伝いすることが目的です。

もみじ学級では 1～4 年生の子ども達が沢山遊んでいました。私たちが入っていくと、最初は「誰だろう?」という感じであまり近づいてきてはくれませんでした。上手く一緒に遊べるか不安でしたが、いつの間にか私たちと子ども達の距離が縮まり、気付けば気軽にそばに来てくれるようになっていました。そうすると、いろんな方向から「こっちに来て」や「○○して遊ぼう」、「○○して」という声が飛び交っている状態で終始引っ張りだこでした。

校庭では、鬼ごっこや遊具で遊びました。室内では、宿題、トランプやおままごと、人生ゲーム、お絵かきなどをして過ごしていました。一緒に遊んでいる間中、子どもたちは私の手をひっぱって「早く行こうよ!」と元気

いっぱいでした。特に、校庭では、鉄棒をやっていたと思っていたら、次はブランコ、ジャングルジム、滑り台とすぐあちこち走り回って、子ども達のパワーに驚きました。

帰りの頃にはなかなか離れてもらえないほど懐いてくれていました。最初は、本当に不安でしたが、短時間で驚くほど仲良くなりました。子ども達に「先生ー」と呼んで懐いてくれるのが嬉しく、一緒に遊ぶことで逆に私たちが元気をもらえました。地域の復興には時間が掛かりますが、子ども達のパワーがなくならないように、今後も支援していきたいと思います。

地域構想学科 2 年生 梅原美香、萩生田千紗



地域構想学科

■ 被災地調査と同窓生訪問（地域構想学科）

2011/06/25 土 14:41 | 投稿者地域構想学科スタッフ

2011 年 6 月 過日、私は地域構想学科の金菱清先生、そして 1 年生の渡邊英莉さんと岩手・宮城県沿岸（**宮古市・釜石市・大船渡市・陸前高田市・気仙沼市**）における震災調査を行った。テレビ・新聞等の報道でご存じの通り、これらの地域では津波被害による甚大な被害を受けており、かつての人々が街を行き交う様子は津波と共に失われてしまった。そのようななかでも人々は活気を取り戻すため、震災以前の生活を取り戻そうと活動されている人々がいるのである。震災から 3 か月経った現地の様子を見ると同時に、人々の「いま」の活動に着目し、**東北学院同窓会のネットワーク**を利用して伺う事になった。



まず、初日に仙台から盛岡を経由して宮古入りをして、東北学院同窓会宮古支部長である千葉胤嗣さんとお会いした。まず、千葉さんの車で宮古市中心部、そして大きな被害の出た同市田老地区を案内して頂いた。千葉さんは宮古市内で人材派遣業を営んでいらっしやったが、津波によって会社の建物は流されてしまった。同市を訪問する前にインターネットの動画サイトで津波到達時の宮古市の様子を見ていた。市役所から撮影されたものであったが、比較的高い防波堤を安々と乗り越える黒い波、そして橋にぶつかる漁船の姿、街の様子はだいぶ酷いのでは、と考えていたが、実際にその映像が撮影された市役所付近では瓦礫の撤去が進み、津波の痕跡はだいぶ少なくなっていたことが印象的だった。千葉さんによると、宮古は津波で被害を受けた地域の中でもいち早く瓦礫を船で北海道苫小牧市へと運ぶ作業が始まったとのことで、津波の被害を受けた沿岸部の地域の中では瓦礫撤去が一番早く進んでいるとのことである。

続いて訪れた同市田老地区でも、同様に瓦礫撤去が進んでいたが、田老地区は古くから「**津波太郎(田老)**」という異名を持つほど、古くから度々津波被害を受けてきたところである。長さ約2キロ、約10メートルの高さを誇る防潮堤が作られ、その姿から「万里の長城」と呼ばれ、田老の町民はその防潮堤があることで安心感を覚えていた。しかし、今回の想定を上回る津波は万里の長城を乗り越えて、多くの犠牲者を出した。田老地区も中心部同様に瓦礫撤去は進んでいたが、あたり一面が更地と化しており、街があった面影は感じることは出来なかった。その後、同じく宮古支部の大澤得次郎さんと榊頭治さんと合流し、「いま」を伺う。お二人も会社や自宅が津波被害に遭い、アパートへの引越しや事務手続き等で忙しい中であつたはずだが、私たちのために時間を割いて来てくださった。東北学院大学の先輩ということもあって、学生当時の思い出話を交えながら、大学卒業後、就職してからの宮古の様子を聞いた。先輩方の表情にはどこか疲労の色を感じたが、明るく宮古の将来を語っていたことが印象的だった。

翌日は国道45号線を南下し、釜石支部長である高橋清一さんにお会いした。高橋さんはご自身が津波到達時に車ごと波に飲まれたが、命からがら脱出し民家の雨樋に掴まり助かったそうである。釜石市は市役所のある中心部にも津波が達し、現在でも瓦礫の撤去はあまり進んでいない印象を受けた。高橋さんは数年前に退職するまで釜石市役所の職員だった。田老地区同様に整備された防波堤が存在したが、津波はそれをも優に超えて陸側に押し寄せたそうである。ハード面の整備ばかりが先行し、構造物に頼ってしまったために被害が拡大したという考えもある。ハード整備と同時に避難所など**ソフト面を含めた総合的な津波対策の見直し**が必要であると、高橋さんは元行政マンらしい視点から仰っていた。釜石は古くから製鉄所が存在し、鉄の街として栄えていたこと、盛岡に次ぐ人口を誇り、「**東北の上海**」とまで呼ばれた活気ある街であった。瓦礫の撤去はまだ進んで居ないが、そのなかでも水産加工の再開や漁の再開に向けた準備が始まり、震災以前の生業を取り戻す活動が進んでいるという事実も認識させられた。

続いて、気仙支部(大船渡・陸前高田)を訪問し、支部員の浦島康弘さんに案内して頂いた。大船渡市においては波が引かずに突然津波が街を襲ったこと、**約50年前のチリ地震津波の際には来なかったから今回は大丈夫だ**と考えた人々が多く被害に遭ったことを伺った。大船渡の街を見下ろせる高台に登って街の景色を見下ろした。ちょうど訪問した日は快晴で、日差しが街を照らしていたが、陸地に打ち上げられた船や2階部分まで窓ガラスが破られた建物などが明るく照らされ、皮肉な光景が照らし出されている印象を受けた。次に隣町である陸前高田市を案内して頂いたが、平野部に広がる街並みは一気に津波に飲み込まれ、波の痕跡が建物の4階部分まで残されていたことに衝撃を覚えた。印象としては「逃げ場がない。」というイメージがあり、海岸に一本だけ残った松が非常な寂しさを掻き立てていた。山間では仮設住宅の建設が進められていたが、かつての街並みに再び住むことができるのか、3ヶ月経ったいまでも、正直に言えば、想像出来なかった。



最後に4月にも調査に訪れた気仙沼市に行った。支部長である斎藤欣也さんに再びお話を伺ったが、斎藤さん自身は自宅と商店の両方が津波被害に遭ったが、現在は高台に家を間借りして、そこに生活拠点を移されたそうである。斎藤さんの商店は漁具を扱っており、再び業務ができるのかを悩んでいたとのことだったが、最近になって漁具の発注が再び入ったそうである。商店のあった場所はまだまだ瓦礫の撤去が進まず被害の色は消えない状況であるはずだが、人々の動きは着実に震災以前に戻し、前向きに動こうとしていることを実感した。

震災から3か月が経過した。訪問した地域が自然豊かなリアス式の海岸が広がる場所であったため、景色に見とれてしまった。しかし、そのリアス式のなかにある街並み、集落を見たとき、津波が遭った場所なのだと気付かされる。瓦礫の山と化したなかにも真新しい電柱を建てる作業をしている方々、商店のなかに溜まった瓦礫を撤去するため精を出す人々、色んな人が見えた。津波被害によって、傷がついたのは街並みだけではない。街並みを形成する人の心も大きく傷ついている。そんな中でも、作業に勤しむ人々を移動中の車内から見つめ、人間の力強さを改めて感じ取った。「いま」はまだ震災直後であり、落ち着く兆しは目では確認することが容易ではなかった。そんな「いま」であっても、人々は常に前を見ていることに希望を感じる。誰もが口にする「未曾有の災害」に際し、私たち学生が出来ること、考えるべきことは何だろうか。ボランティアをすることも手段であるし、今後の防災を考えることも重要である。そのなかでも私は、改めて人々の行動に着目したいという気持ちが強くなった。今は瓦礫の街であっても、より良い街にするため、或いは、かつての賑わいを取り戻すため「いま」と戦っている人たちが大勢居るのである。私は生まれ育った東北の地でそんな人々の「いま」を見つめると同時に、「明日」を考えて行きたい。

(文責:地域構想学科4年生 小山悠)

地域構想学科

■ 震災復興に向けて(私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)

2012/01/16 月 11:26 | 投稿者地域構想学科スタッフ

教養学部では、地域構想学科を中心に、「**地域災害脆弱性の克服と持続基盤形成を促す大学・地域協働拠点の構築**」というプロジェクトに取り組んでいます。未曾有の震災から、10ヶ月が経過した現在、これまでのプロジェクトの進捗状況とこれからの計画について、**1月20日、21日の両日で、国際会議・地域会議を開催することにしました。**

20日の国際会議・地域会議は、本学地域構想学科がこれまでに蓄積してきた地域との付き合いと、東日本大震災の経験を繋げて、より健やかで持続的な地域社会の構築を模索するためのヒントを考えます。

21日にはサテライト会議として、同じく教養学部と東京情報大学による「フォーラム 仙台湾／海岸エコトーンの復興を考える」と題した報告会を開催します。2日間にわたる国際会議・地域会議、そしてサテライト会議ですが、ぜひぜひご来場してください。

場所:東北学院大学土樋キャンパス[8号館5階 押川記念ホール]

交通案内は[こちら](#)



地域構想学科

■ スポーツ参加に対する震災の影響・総合研究の成果 (2)

2012/02/07 火 21:34 | 投稿者地域構想学科スタッフ

地域構想学科の総合研究(卒論)の成果の一部を紹介させていただきます。昨日、菅原(地域構想・高橋ゼミ)が「**泉パークタウン地区住民の運動意欲は向上傾向にある**」と報告しましたが、私の卒論では**全く逆の現象**が見られました。私の卒業論文のテーマは「広報活動から見る運動教室への参加行動の変化」です。

ゼミ生が運営している運動教室(U-ch)は3ヶ月を1つの期としています。参加者の方は4期以上継続することが多く、ほとんどがベテランですが、各期の開催時では若干名の新規参加者を募集しています。クチコミで新規参加する方が多いのですが、高橋ゼミで毎年1回(9月中旬)行う広報活動(ビラ配り)をきっかけに参加する方もいます。



図1は、2007年から2011年の広報活動の結果を示しています。

す。縦軸の広告反応率(%)とは、ビラ100枚当たりの新規参加者数です。**2007年から2010年まで、広告反応率は約2.0%と一定**の値を示しています。「運動意欲が向上しているの、2011年の広告反応率は向上するのでは？」(図中赤の破線)と予想しました。しかし、**現実(青の実線)は0.0%(新規参加者0人)**でした...(U-ch開始以来初)。

運動教室で継続参加の方にそのことを話してみると、「そりゃそうじゃない？震災で家とか壊れたり、その工事があつたり、忙しいでしょ」や「私も今だったら新規で参加しないと思う。震災があつたから、新しいことを始める、っていうふうにならないでしょ？」などの感想を頂きました。

そこで震災の影響を分析してみました。表1は、震災前(2007年から2010年の合計)と震災後(2011年のみ)の広報活動の結果を示しています。計算された連関係数は低い値(Cramer's V = 0.07)ですが、統計的に有意な関連が見られました。つまり、わずかではありますが、震災が運動教室への新規参加に影響していることがわかりました。運動教室を開催している泉パークタウン地区は、津波被害はもちろんなく、大きな被害があつた地区ではありません。**そのような地区でも、震災の影響があつたこと**に少し驚きました(震災の規模を考えれば当然かもしれませんが)。

表1. 震災と運動教室への新規申込の関連

震災前後	新規申込した人	申し込まなかった人	ピア配布枚数
震災前	16 (2.1%)	734 (97.9%)	750 (100.0%)
震災後	0 (0.0%)	180 (100.0%)	180 (100.0%)

$\chi^2(1) = 3.9$ (Cramerの連関係数 $V = 0.07$) , $p = 0.048$

スポーツなどを含む文化的活動を行うサークル・コミュニティに

参加することは健康の維持増進に効果を有することを報告している研究が多くあります。今回の卒論で、東日本大震災のような災害後では、新たなコミュニティに参加することが困難になることがわかりました。なので、より良い地域をつくるためには、**普段から利用・参加できるコミュニティを数多く準備する必要がある**と強く感じました。今後も、後輩達には、良い運動教室運営を行い、災害に負けない地域づくりに貢献して欲しいと思います。

地域構想 4 年 矢野 淳史 (福島東高校出身)

地域構想学科

■ 震災の記録プロジェクト 3.11 の記録

2012/02/14 火 13:19 | 投稿者 地域構想学科スタッフ

この度、教養学部地域構想学科の金菱清准教授(東北学院大学 震災の記録プロジェクト)の編著による「**3.11 慟哭の記憶**」2月20日、新曜社より発売になります。この本は金菱先生のゼミ学生たちを中心にプロジェクトチームを編成し、「震災レポート」として、早い段階で覚えている限りの記録を集めたレポートを編集したものです。

本書が収集した記録は、宮城・岩手・福島の3県 27 市町村、その他秋田・千葉・東京と広範囲にわたり、執筆者数は 71 人、560 ページにのぼる**大震災の記録**となっています。

詳細は[こちら](#)



さて、この本の編者・金菱先生が、アメリカのテレビとラジオ

番組の取材を受けました。2月13日、アメリカのテレビとラジオの放送局である、PBS の番組「**News Hour**」とラジオ局 PRI の番組「**The World**」の取材です。取材クルーの話によると、「震災から一年が経った被災地」の特集の一環で、「水産業復興特区のことを含めてどうすれば若者がもっと漁業に参加できるか」についての取材でした。

詳細は[こちら](#)



地域構想学科



3月12日から、東北学院大学の有志たちが1週間ごとに交替で、南三陸町立志津川中学校へ、学習支援ボランティアとして派遣されて頑張っております。

一週間は、1年生の学生たちが、京都教育大学から派遣された学生さんたちと、教室の掃除や瓦礫撤去もお手伝いして、慣れないながらも、試行錯誤しながら学習支援を頑張ったそうです。2週目は情報学科の3年生の女子が3名、愛知教育大学から派遣された5名の学生さんたちと、和気あいあいとしながら頑張っていました。

3月21日、22日と、教育セクションの教員が視察に行っていました。写真はその様子の一部です。他の大学の学生さんたちと触れ合うこと、普段あまり接することのできない教育現場、教員、生徒たちと実際に触れ合って、いろいろと戸惑いながらも、一生懸命できることに取り組んでいる様子が、とても微笑ましい限りでした。



南三陸町は、仙台に暮らしている私たちにとっては、まだまだ極めて痛々しい町並みのままです。そしてその町並みは、教室から一望されます。その状況中で、健気に明るく過ごしている生徒たち、そして何より被災しながらも気丈に頑張っておられる先生方の様子に触れ、私たちにできること、すべきことを改めて考えさせられました。

校長先生曰く、できるだけたくさんの方が観光に来て、経済を発展させてくれるのが一番だとのこと。今回教員たちも学生たちも南三陸ホテル観洋さんに宿泊させていただきましたが、大変行き届いた接客とおいしいお料理に大満足でした！ちなみに、お部屋やお風呂から見える大海原は圧巻です！民宿もいくつか営業を始めていますし、志津川中学校のすぐそばに立ち上げられている復興市では、「キラキラ丼」なる海鮮丼なども食べられます。

ぜひ皆様も足を運んでみてはいかがでしょうか。